

幼稚園生活から小学校生活への接続に関する研究

—学びの連続性を考える—

幼児教育研究会議

研修員 植平 公子（川崎市立小倉小学校）

山口 和賀子（川崎市立大谷戸小学校）

新村 玲子（川崎市立新城幼稚園）

吉田 まり子（川崎市立生田幼稚園）

指導主事 山本 陽子

I 主題設定の理由

幼小連携の研究は、平成 15 年度より幼児教育センターの幼児教育研究会議の中で進められてきた。平成 15 年度は、段差に焦点を当て、接続を円滑にしていくための教師の援助の在り方についての研究を行い 16 年度はそれぞれの生活体験に焦点を当て、人と関わる力の育ちをつなげていくための研究を進めてきた。

昨今、教育改革の中でも小学校教育との連携・強化が求められ、連携に向けての様々な取組がなされている。川崎市においても幼小の子ども同士の間での交流や職員の交流はなされてきており、そこでの成果も見られる。しかし、連携の中の教育内容の連続性や子どもの発達、学びのつながりを考えていく必要がある。そこで今年度は、幼児期の経験が小学校の教科を中心とした学習にどのようにつながっていくのかを事例を、通して具体的に探っていくことにした。

II 研究の内容

1 研究の方法

(1) 相互理解を深める

①子どもの様子や生活について

- ・互いの生活や様子を知るために、幼稚園や小学校の 1 日の流れについて話し合いをする。
- ・幼稚園生活と小学校生活の現状について話し合う。（大事にしていること・困っていること）

②教育内容について

- ・公立幼稚園の紹介ビデオと 4 歳・5 歳児の遊びのビデオを視聴し、遊びを中心に話し合う。
- ・各園と 1 年生の指導計画や指導案を持ち寄り、指導の流れや内容について理解を深める。
- ・5・6 月に幼稚園の遊びの様子、10 月小学校の 1・2 年生を参観し、気づいたことを話し合う。

第 1 学年 A 小学校 国語科年間指導計画（年間 242 時間）より抜粋

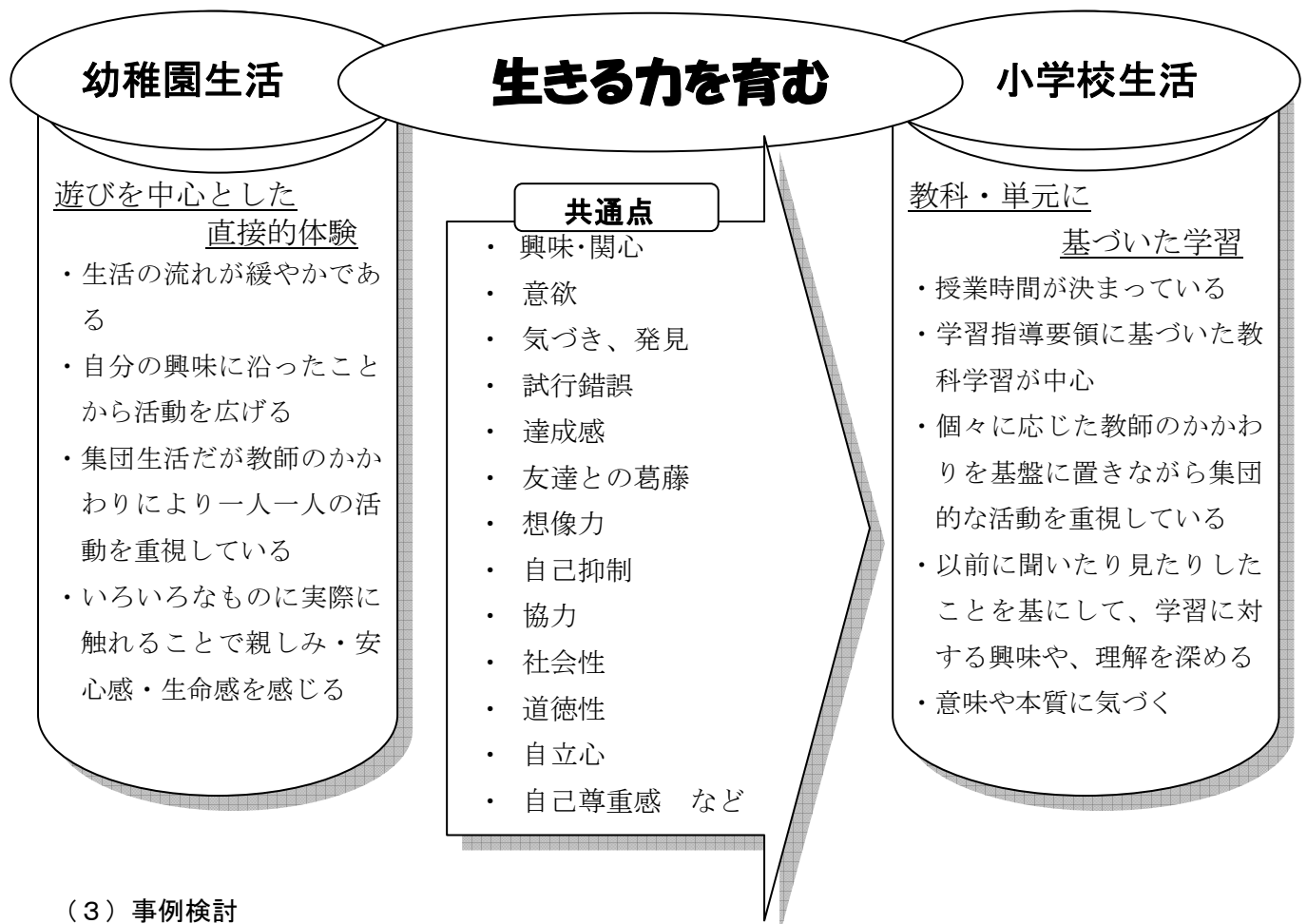
月	4 月 *数字は時間数	5 月
単 元 名 ・ 学 習 内 容	はる（3） ・挿絵を見て知らせたいことをわかりやすく話す。 おはなしよんで（3） ・昔話などについて知っていることを話す。 ・先生の読む話を聞く。 どうぞよろしく（4） ・自分の名前をていねいに書く。 うたにあわせてあいうえお（3） ・語のまとまりや響き、姿勢や口形に注意して読む。	たんけんしたよ、みつけたよ（5） <関連（生活科）学校探検> ・学校探検をして、挨拶をしたり尋ねたりする。 かきとかぎ（3） ・濁音のついた言葉を正しく読んだり書いたりする。 ともだち（2） ・まとまりや内容、言葉の響きを考えながら音読する。 ねことねっこ（3） ・促音、濁音、半濁音などの表記を読んだり書いたりする。 はなのみち（8） ・文章や挿絵を見て、想像を広げながら読む。 ・紙芝居を作り、発表する。

(2) 幼稚園教育と小学校教育の共通点や相違点について確認をする。

・「幼稚園教育要領」「小学校学習指導要領」その他参考文献として「幼児期から児童期の教育」を読み合い、共通点や相違点についてまとめた。

<研究会議でとらえた共通点と相違点>

- ・ 共通点……生きる力をはぐくむことをねらいとし、各期の発達の特性を踏まえた教育課程によって指導計画を作成し、専門家である教師が指導にあたる。
- ・ 相違点……教育課程の編成や指導の方法において異なっている点がある。
(小学校以降の教育は、教科等の授業を中心とする教育。)



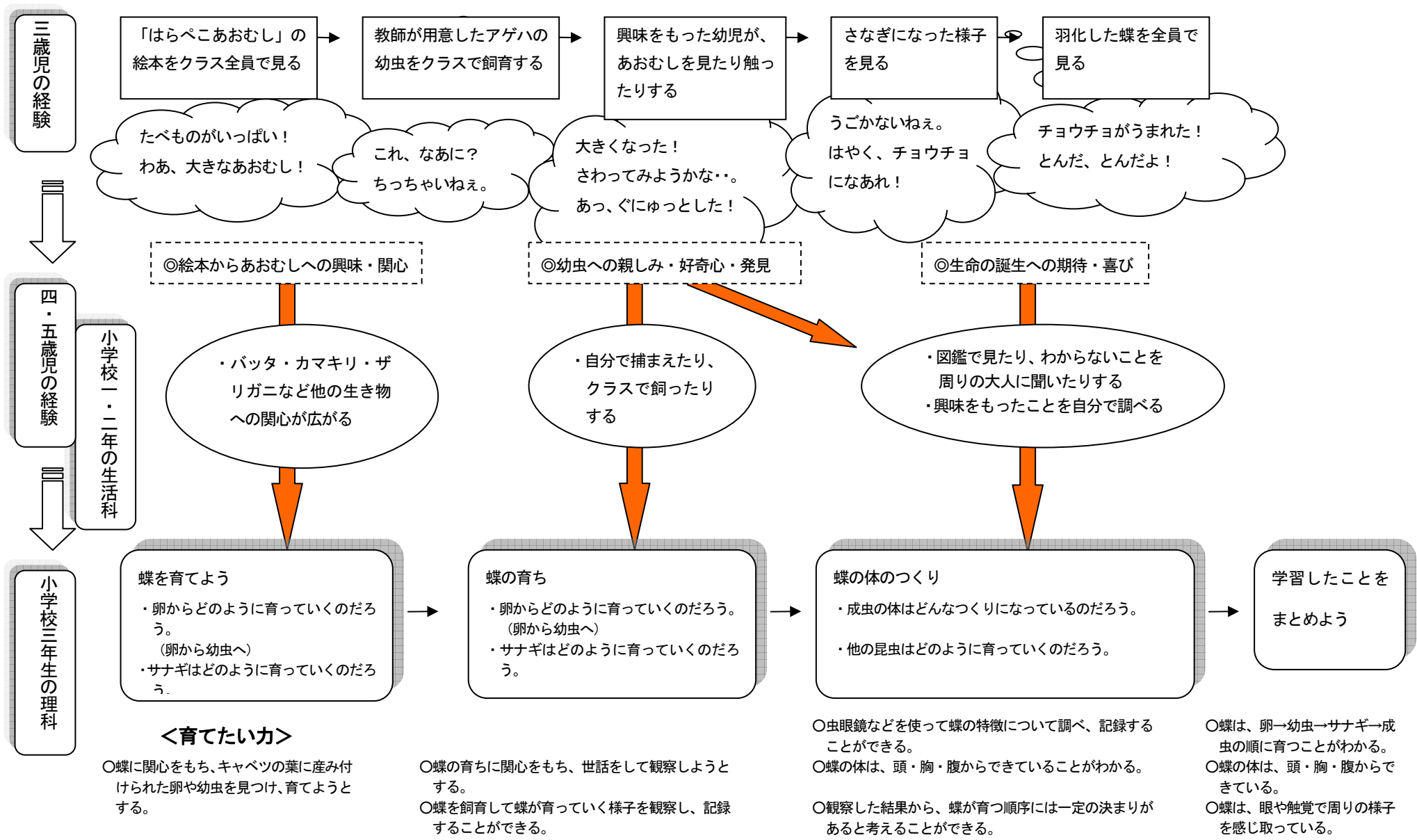
(3) 事例検討

・ 事例1では、3歳児のチョウとの体験と小学校3年生の理科学習とのつながり、事例2ではザリガニの飼育を通し他の学習とのつながりを探った。

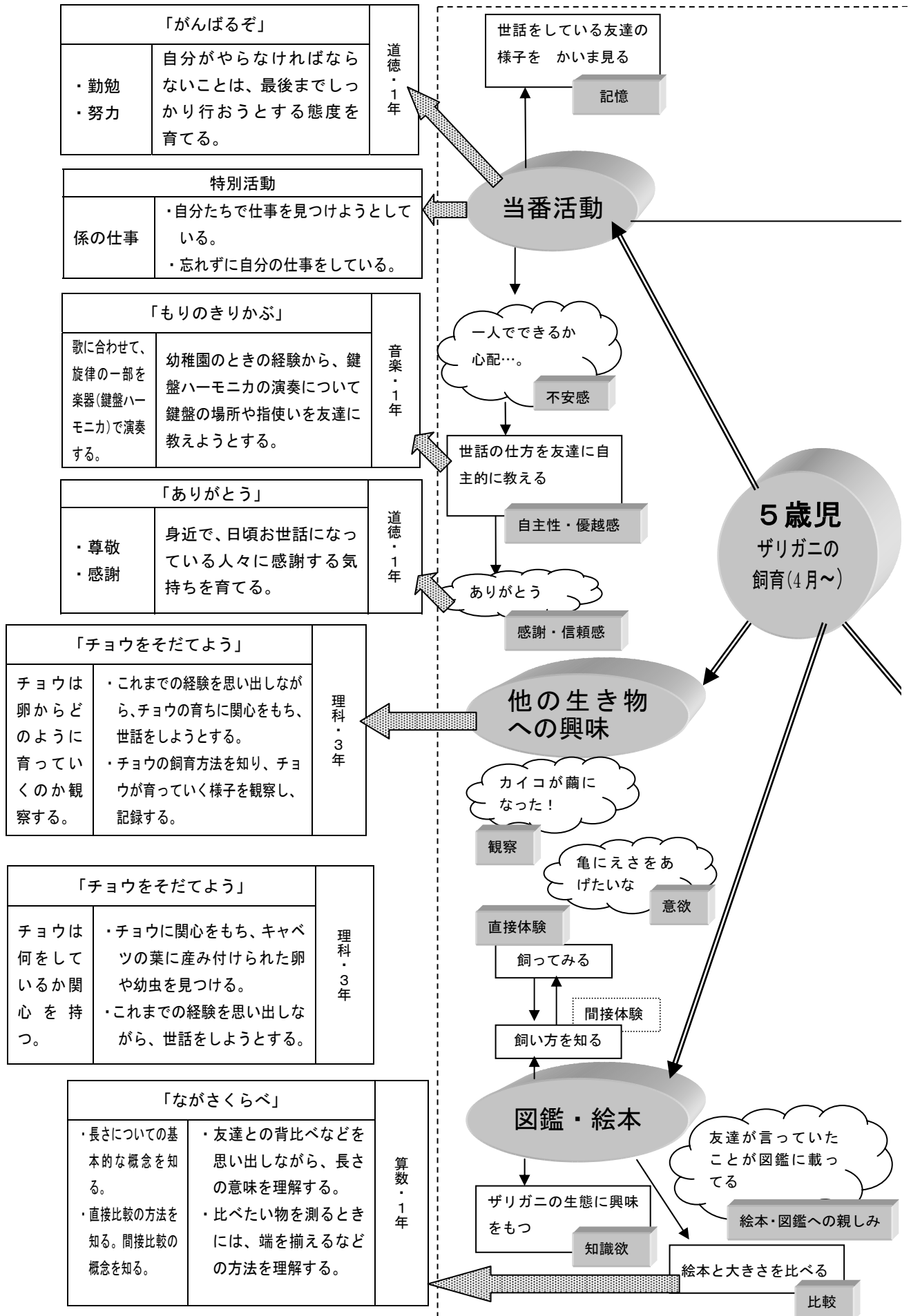
<参考「小学校学習指導要領」の目標から抜粋>

小学校 生活科 (1・2年) から	理科 3年から
○具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。	○自然に親しみ、見通しをもって観察、実験などを行い、問題解決の能力と自然を愛する心情を育てるとともに自然の事物・現象についての理解を図り、科学的な見方や考え方を養う。

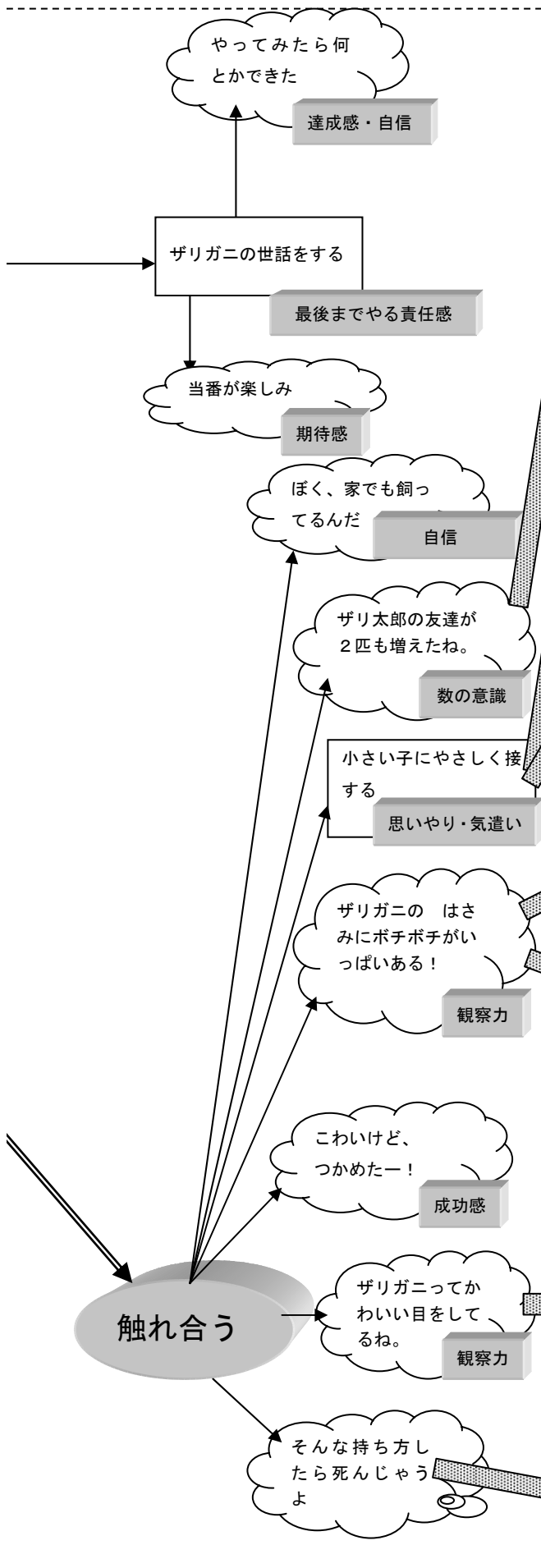
事例1. 「3歳児の蝶との出会い」から「小学校理科の学習」へ



事例2. 園生活の中で、ザリガニの飼育にかかわる経験が、小学校の学習活動につながるとされる事例



凡例	学年・教科	単元名
	内容	・子どもの姿 ・育てたい力



算数・1年	「なかよし」「いくつかな」「ぜんぶでいくつ」	
	身の回り にある数量 に関心をもち をもつ。	<ul style="list-style-type: none"> 教科書の絵を見ながら、数に関心をもって数えようとしている。 具体物と数が同じ意味であることがわかる。 これまでの経験を生かしなが、1~10の数詞を知り、数量の大きさを表すのに数を用いることを知る。

道徳・1年	「こころのやさしいくまさん」	
	<ul style="list-style-type: none"> 親切 思いやり 	<ul style="list-style-type: none"> わがままや意地悪をせず、身近にいる弱い人に親切にしようとする態度を育てる。

道徳・1年	「ちょうちよさんよかったね」	
	<ul style="list-style-type: none"> 親切 思いやり 	<ul style="list-style-type: none"> 相手のことを思いやり、親切にしようとする気持ちを育てる。

生活・2年	「生きものともだち」	
	<ul style="list-style-type: none"> 季節（夏や秋）を探す。 虫探し 虫の観察 虫の特徴をまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 季節を感じ、季節の変化を探す。 虫の住んでいる所を観察し、捕まえた虫の世話をすることができる。

国語・1年	「よく見てかこう」	
	<ul style="list-style-type: none"> 観察力 観たことをわかりやすく 	<ul style="list-style-type: none"> 書きたいことを見つけ、読む人にわかるように書く。

図工・1年	「動物のパーティー」(粘土)	
	<ul style="list-style-type: none"> 想像しながら楽しく作る。 友達とアイディアを出し合い、協力して作る。 	<ul style="list-style-type: none"> 作りたいものを、数多く思いついたものを粘土で作る。

道徳・1年	「いのちをたいせつに」	
	<ul style="list-style-type: none"> 生命尊重 	<ul style="list-style-type: none"> 生きていることのすばらしさに気づかせ、命を大切にしようとする心情を育てる。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究を通して見えてきたこと

○事例1からは、3歳児の直接体験と小学校の学習が次のように関連していることがわかった。

- ・3歳児では大好きな絵本からチョウに興味をもち、幼児なりに大きくなっていく様子を目で確かめたり手で触れて感じ取ったりし、その中で教師や友達に思いを伝えたり共感したりしながら、自分以外のものの存在や関わり方について学んでいると思われる。
- ・4・5歳児～小学校1・2年生活科では、生き物についての興味関心がさらに広がって、自分で飼育したり図鑑で調べたりするなどの活動を繰り返しながら、生き物が自分の身近な存在となる。
- ・小学校3年の理科学習では、単元を通し昆虫に関心をもち、観察したことを絵や文字を使って記録することで、チョウの体のしくみや成長について理解を深めている。3歳児は「大きくなった」「動かなくなった」というとらえ方をし、3年生は、「一定の順序で育つ」「『頭・胸・腹』から体ができている」など、より具体的なこととして学習していく。

この事例を通し、小さいときに経験し話し合ったことが、3年の学習で文章化するとき生きてきたり、幼稚園での「飼育」「触れる」「感じたことを話す」などの経験が、3年の学習場面で具体的な活動（観察）に結びつき、知識だけでない学びが可能となったりする。このように、幼稚園での経験が小学校の学習にどのように結びついていくか具体的に考えることができた。また、幼児期にはいろいろな体験を通し「気づいたり考えたりしながら、自分なりに次の目標に向かおうとする意欲や態度」を培うことが大切で、このことが小学校での「学ぼうとする意欲」につながると言える。

○事例2からは、5歳児の経験と小学校でのいろいろな学習面での姿が次のようにわかった。

- ・幼稚園での直接体験が、小学校での学習や生活に深く結びついている。ザリガニと遊びながら、観察力が培われ1年図工の粘土遊びの中で発揮したり、命について考えたことを各学年の道徳「生命尊重」の時間に思い出したりすることができる。また、当番活動をする中で頑張る気持ちが育ち、特別活動の係の仕事に生かすことができ、当番活動の仕方を友達に教えた経験から、音楽では鍵盤ハーモニカの演奏の方法を友達に教えるなど、他者に関わりをもとめようとする姿につながっている。
- ・幼稚園での直接体験が豊かであるほど、小学校での学習や生活に自信をもつことができる。

このように、幼稚園での直接体験が小学校での学習や生活に結びついている事が多く、児童にとって、これまでの体験から得られたことをやってみるとうまくいくことが多くなれば、自己効力感が身につき、自信をもって行動できるようになる。

2 今後の課題

幼小連携の必要性や重要性はこれまでも言われてきている。幼稚園や小学校低学年の担当者が、少しでも互いの実践を知り合える場が設定できれば、充実した連携が図れると考える。連携の方法として、①事例から明らかになったことを広める。②近隣の幼小との交流の時間を設定し、継続的に行う。③研究会や学校公開日などの機会を生かして、互いの保育や授業を参観したり、交流会を通して担当者が互いに知り合いになったりすることも大切である。

最後に、研究を進めるにあたり適切なご指導をいただきました先生方に、心より感謝し厚くお礼申し上げます。

【参考文献】

文部科学省中央教育審議会答申

2005年

国立教育政策研究所教育課程研究センター『幼児期から児童期への教育』

2005年

【指導助言者】

大妻女子大学教授（川崎市総合教育センター専門員）

柴崎 正行